

シュヴァルツェスマーケン・えくすとら♪

第3話「テオドール争奪・料理対決！！」

1. デートの権利を賭けて

それはよく晴れた清々しい土曜日の昼・・・休日で人が少ない私立マブラヴ学園の、調理実習室での出来事だった。

「・・・よし、これで全員揃ったな。先日テオドールに内緒で告知した通り、これからお前らには料理対決をして貰うからな。」

「いやいやいやいやいや、朝飯と昼飯を抜いて昼に学校に来いって先生に言われたから何かと思えば、何でいきなりこいつらが料理対決する事になるんですか！？」

ヨアヒムの言葉に、露骨に不服そうな態度を示すテオドール。

そして他に調理実習室に集まったのは、リズ、アイリスディーナ、カティア、アネット、ファム、キルケ、ベアトリクス、アスクマンの8人。

彼らはテオドールに極秘で行われたヨアヒムの呼びかけに応じ、こうして休日の学校にわざわざ集まってきたのだ。

全員が制服にエプロンを身に付け、それぞれに用意されたテーブルの前で待機している。

テーブルの上には各員が独自に用意した、色とりどりの食材の数々が置かれていたのだが。

「テオドール、リズ、カティア、アネット。お前ら明日は確かバイト休みだったよな？」

「え、ええ、明日は俺たち全員シフトから外れてますけど・・・。」

「よし、ならば問題無いな。」

「何が問題無いんですか！？て言うか何でそんな事まで先生が知ってるんですか！？」

「ベアトリクスにお前らのシフト表を見せて貰ったからな。」

「どうやって手に入れたんだよ！？シュター部怖えよ(泣)！！」

テオドールの泣きそうな表情を、ベアトリクスはドヤ顔で見つめていたのだった。

従業員のシフト表は事務所内にあり、決して客席からは見れないようになっている上に、ファミレスの従業員にはシュター部の部員も、その親族も存在しない。

にも関わらずベアトリクスは、一体どうやってテオドールとリズのシフト表を入手したというのか。と言うか、もう個人情報もプライバシーも何もあった物では無かった・・・。

「テオドール。お前がこの学校に入学してから1週間・・・お前の事をずっと見させて貰っていたが、お前のモテっぷりは正直言って半端ではない。たった1週間でお前に好意を寄せる女子たちが、これだけ大勢現れやがる始末だ。本当に羨ましい奴だなおい。」

何故かアスクマンまでいる事に、誰も突っ込みを入れないのは何故なのか。

「しかも別の高校に通う俺の姪(キルケ)にまで手を出しやがって。馬鹿野郎この野郎。」

「だからそれが何で料理対決に繋がるんですか！？」

「そりゃあお前、こいつらが毎日毎日毎日毎日、四六時中お前を奪い合って見てられねえから、決着を付けさせる場を用意したに決まってるだろうが。」

そう、ヨアヒムの言う通り、あれから壮絶なテオドールの奪い合いが、彼女たちの手によって毎日のように派手に繰り広げられているのだ。しかもそれは校内に限った話ではない。

毎日のようにテオドールを起こしに来るついでに、何故か一緒に添い寝するアイリスディーナ。テオドールと一緒に過ごす時間を少しでも増やす為に、わざわざ自分と同じバイトに誘うアネット、そしてテオドールと同じファミレスでバイトするリズとカティア。別の高校に通うキルケに至っては、わざわざテオドールに会う為に、テオドールがバイトするファミレスに毎日通い出す始末だ。

さすがにこのままではまずいと思ったヨアヒムが、ひとまずの一区切りの決着の場を与える為に、こうして料理対決を開いたという訳だ。

「料理対決の内容は至ってシンプルだ。お前らが自分で用意した食材を使った料理を、実際にテオドールに食べて貰う。そしてテオドールを一番満足させた奴が優勝だ。」
「朝飯と昼飯を抜いて来いって、そういう事かよおっ！？」

テオドールの腹が、さっきから盛大に鳴り響いていたのだった……。

「そして優勝者には明日の日曜日、テオドールと1日デートする権利を与える物とする。」
「はあああああああああああああああああああああああ！？」
「なお、お前に拒否権は無い……もし万が一お前が優勝者とのデートをすっぽかすような真似をした場合、罰として毎朝トイレ掃除を1週間やって貰うからな。」
「横暴だ！！職権の乱用だ(泣)！！」

というかトイレ掃除一週間分って、物凄くどうでもいい罰則のような気がするのだが……。
泣き叫ぶテオドールを無視して、ヨアヒムは右手を高々と掲げ、大々的に宣言したのだった。

「これより第1回、テオドール争奪・料理対決を開始する！！」
「第1回って、第2回以降もあるのかよおっ(泣)！！」
「選手宣誓！！リズ・ホーエンシュタイン、前へ！！」
「何この日本の高校野球みたいなノリ(泣)！？」

ヨアヒムに促されたリズが教壇の上に立ち、ヨアヒムと同じように右手を高々と掲げ……。

「……宣誓！！我々選手一同は、お兄ちゃんへの愛に賭けて……どんな手段を用いても全員徹底的に叩きのめしてあげるから、アンタたちせいぜい無駄な足掻きをしておくがいいわ！！あはははははは！！」

全身から漆黒のオーラを放ちながら、物凄い表情で宣言したのだった。

「いや、そこはスポーツマンシップに則って、正々堂々と戦う事を誓えよ(泣)！！」
「待っててね、お兄ちゃん……お兄ちゃんを満足させられるのは私しかないって事を、お兄ちゃんに思い知らせてあげるんだから！！」
「俺の話聞ってる(泣)！？」

そしてリズが自分の持ち場に戻ったのを確認したヨアヒムが、現在時刻を確認してストップウォッチを懐から取り出す。

「現在時刻は12時20分、調理の制限時間は30分とする！！30分以内にテオドールを満足させられる料理を作ってみせろ！！それじゃあお前ら調理開始だ！！」

ヨアヒムがストップウォッチを押したのを確認したリズたちが、一斉に調理を開始する。

今ここに、テオドールとのデートの権利を賭けた壮絶でしょーもない料理対決が、当の本人であるテオドールの承諾も無しに、勝手に開始されたのだった…。

2. アイリスディーナの料理

「…ところでベアトリクス。何故お前までもがこの料理対決に参加しているのだ？」

リズたちが物凄い勢いで調理を行う最中、アイリスディーナとベアトリクスだけは包丁にも食材にも全く手を付ける事なく、まるで調理を行っていないかった。

アイリスディーナが厳しい視線を隣にいるベアトリクスに向けているのだが、当のベアトリクスは妖艶な笑みを浮かべながらアイリスディーナの視線を無視し、今にも腹が減って死にそうなテオドールを見つめている。

「お前はテオドールには興味が無い、私の兄上が好きなのだと、以前私に言っていたらう。」

「ええ、貴方の言う通り、私が好きなのはユルゲンよ。あの坊やには正直言って興味無いわ。」

「ならば何故私の邪魔をするような真似をする？互いに互いの恋の手助けをすると、先日互いに誓い合ったばかりではないか。」

「それは彼が恋愛原子核の持ち主だからよ。」

「…な…！？」

突然聞きなれない言葉を耳にした事で、戸惑いの表情を隠せないアイリスディーナ。

「恋愛原子核だと！？何だそれは！？」

「貴方は彼を見て一度でもおかしいとは思わなかったの？先生も言っていたけれど、彼はこの短期間であれだけの数の女子を虜にしてしまった…これはもう異常だとしか言いようがないわ。」

「…それは…テオドールがそれだけの魅力の持ち主だというだけの話だ。」

アイリスディーナとて、リズたち恋敵に対して嫉妬の感情があるのは否定はしない。

だが、だからこそテオドールへの愛が一層深まるという物だし、リズたちの本気の「想い」もよく理解しているつもりだ。

恋愛原子核だか何だか知らないが、自分やリズたちと違ってテオドールと特に親しくもない癖に、そんな訳の分からない事を言われる筋合いは無い。

「…ベアトリクス。お前はテオドールとまともに接した事が無いから…」

「それだけの魅力の持ち主…本当にそれだけだと思う？ただ魅力的な男子だからというだけで、あれだけの数の女の子が一斉に彼に集まるとでも？そんなの絶対に有り得る訳が無いわ。」

ベアトリクスは先日シューター部の部活動中に部員たちに話した、恋愛原子核に関する持論をアイリスディーナにも説明したのだった。

日本の横浜に存在する高校に、今のテオドールと似たような境遇の男子生徒がいる事。
その男子生徒は幼馴染やクラスメイトの数人の女子、さらには担任の女性教師まで虜にしてしまっているという事。

おまけに世界的な資産家である御剣財閥の双子の姉妹までもが、その男子生徒と添い遂げる為だけに、わざわざ他校から転校してきた事。

しかも、その男子生徒は特に女子を口説こうとしてる訳でもなく、本人の自覚も無しに勝手に女子たちが集まっているという事。

そのあまりに常識を逸しているモテっぷりに興味を抱いた、その高校の学年主任を務める女性教師が興味本位で男子生徒を調べた所、その男子生徒のモテっぷりは細胞レベルにまで達している事が判明した事。

そんな男子生徒がその身に宿す特性を、彼女が「恋愛原子核」と名付けた事。

「・・・で、仮にテオドールがその白銀武と同じ、恋愛原子核とやらの持ち主だとして・・・仮にお前がこの料理対決で優勝したとして、お前はテオドールを一体どうするつもりなのだ？」

ベアトリクスはテオドールには一切興味が無い、愛しているのはユルゲンだけだとアイリスディーナに公言しているのだ。

なのに今回のテオドールとのデートを賭けた料理対決に参加し、しかも本気で優勝を狙っている・・・一体何を企んでいるのか。

この矛盾を孕んだベアトリクスの行動に、アイリスディーナは言いようの無い不安を感じていたのだが・・・。

「まさかお前までもがテオドールに恋焦がれたという訳でも無いだろう。なのに一体どういうつもりなんだ？」

「私が優勝を目指す目的は、彼の研究の為よ。」

「な・・・研究だと！？」

放たれたベアトリクスの返答は、アイリスディーナが全く予想もしていなかった、とんでもない代物だった。

「私が優勝した暁には彼を私の自宅に招待し・・・彼がその身に宿す恋愛原子核を徹底的に分析させて貰うわ。」

「・・・ベアトリクス・・・貴様・・・！！」

「そう、私は彼に興味は無い・・・私が興味があるのは、彼がその身に宿す恋愛原子核だけよ。」

リーズたちはテオドールに対して本気で恋愛感情を抱いており、明日のデートの為に真剣に調理に取り組んでいる。

そんなリーズたちに混じってベアトリクスはテオドールに興味が無いと言い放ち、テオドールを研究する為に大会に参加したというのだ。

テオドールがベアトリクスに何をされるか分かった物ではないというのもあるが、これはリーズたちのテオドールへの「想い」に対する侮辱に他ならない。それがアイリスディーナにはどうしても許せなかった。

「彼がどんな経緯で恋愛原子核を宿す事になったのか、恋愛原子核が周囲にどれだけの影響を及ぼす物なのか、どれ程の効力を持つ物なのか・・・私は凄く興味があるのよ。」

「・・・ベアトリクス。やはり私は、お前とアスクマンにだけは優勝させる訳にはいかないようだ。」

ベアトリクスに対して、敵意をむき出しにするアイリスディーナ。
そんなアイリスディーナの厳しい視線を、ベアトリクスは余裕の表情で受け流す。
調理開始から既に5分が経過したというのに、相変わらずアイリスディーナもベアトリクスも、全く包丁や食材に手を付けていなかったのだが……。

「あ〜ら、今までまともに包丁を持った事も無い貴方が、一体どうやって私に勝つというのかしら？これはあくまでも料理対決なのよ？」
「そうだな、私は今まで料理など一度もした事が無い。」
「見た限りでは相当高価な食材ばかりを用意したみたいだけど、それも料理人が活かさなければ何の意味も無いのよ？」
「確かにお前の言う通りだ……だがなベアトリクス……誰が『私が調理する』と言った？」
「な……何ですって！？」

アイリスディーナが勝ち誇った笑顔で、指をパチン！！と鳴らすと……ガラガラガラと勢い良く扉が開け放たれ、先程から待機していた3人のコック姿の料理人の男性たちが、一斉にアイリスディーナの元に駆け寄り、跪いたのだった……。
彼らは3人共ベルンハルト家の使用人たちであり、一家の毎日の料理全般を任されているプロの料理人たちだ。
全員がドイツの有名な料理大会で優秀な成績を収めた程の凄腕であり、その手腕を高く評価されベルンハルト家にスカウトされ、今も専属の料理人として働いているのだ。

「……お前たち。」
「「はっ！！」」
「……やれ。」
「「承知致しました！！お嬢様！！」」

アイリスディーナの号令の元、3人の料理人たちが物凄い勢いで目の前の食材を捌いていく。そのまさかの光景に、さすがのベアトリクスも動揺を隠せないでいた。
アイリスディーナは全く包丁や食材に手を付ける事なく、余裕の態度で腕組みをしながら、勝ち誇った笑顔で彼らの調理を見守っているのだが……。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！！自分で調理せずにプロの料理人に全部やらせるって、これってどう考えても反則じゃないの！？ねえってば！！」
「いやいやいやいやベアトリクス。ヨアヒム先生は確かにこう仰られていたぞ。」

『料理対決の内容は至ってシンプルだ。お前らが自分で用意した食材を使った料理を、実際にテオドールに食べて貰う。そしてテオドールを一番満足させた奴が優勝だ。』

「そうよ！！だからプロの料理人に任せるなんて卑怯だと私は……！！」
「卑怯？ヨアヒム先生は『自分で食材を用意しろ』と言っただけであって、『自分の手で調理しなければならぬ』などとは、ただの一言も言っていないのだからなあ？」
「……はあああああああああああああああああああああ！？」

アイリスディーナは物凄い笑顔で、ベアトリクスに物凄い反論をしたのだった……。
そう、確かにアイリスディーナの言う通りだ。
↑のヨアヒムの言葉をもう一度読み返してみれば分かるが、ヨアヒムがアイリスディーナたちに要

求したのは『自分で用意した食材を使え』という事だけだ。『自分で調理しろ』などとは確かに一言も言っていない。

「そ、そんなのは屁理屈よ！！料理対決なんだから自分で調理しないと駄目に決まっているでしょう！？」

「負け惜しみなど見苦しいぞベアトリクス。他人に調理を任せるのが禁止だと、ヨアヒム先生がいつそんな事を言った？」

「ぬぐぐぐぐぐぐ…！！」

悔しがるベアトリクスだったが、そうこうしている内に3人の料理人たちの手によって、あっという間に料理が出来上がってしまった。

料理人たちの手によって、今にも腹ペコで死にそうなテオドールに差し出されたのは、とても美味しそうな香りが漂う高級肉料理。

「お待たせ致しましたテオドール様。ウインナーシュニッツェルとレーバーケーゼ、ミュンヘナーヴァイスブルストをメインに、シュパーゲルとクネーデルにオランダールソールを添えさせて頂きました。」

なんか凄く長ったらしい名前の、よく分からんメニューが出た。

「リズ。お前が先程言った言葉をそっくりそのまま返してやろう。どんな手段を使ってでもお前たちを徹底的に叩きのめすとな。」

「……。」

「お前も確かに兄上が絶賛する程の料理人のようだが、それでも所詮は家庭料理の域を出ないアマチュアだ。正当な修行を積んだ彼らプロには到底敵うまい。」

「……ふふふ……。」

「ヨアヒム先生が料理対決を持ちかけた時点で、既に私の勝ちが決まっていたのだよ！！は————っはははははははははは！！」

勝ち誇るアイリスディーナを尻目に、テオドールは黙々と高級肉料理を口にしながら、一口食べ終えた所で、突然テオドールがナイフとフォークをテーブルの上に置いたのだった。

「……うーん、なんか違うんだよなあ……。」

そしてテオドールは戸惑いの表情で、不満そうな態度を示す。

その予想外のテオドールの態度に、アイリスディーナの表情から先程までの余裕が消え失せていった。

「な……一体どういう事なんだテオドール！？何か嫌いな物でも混ざっていたか！？」

「いや、凄く美味しいよ。美味いんだけどさあ……なんか食べた気がしないというか……。」

「食べた気がしないだと！？一体どういう事なんだ！？」

彼らは全員が有名な料理大会で優秀な成績を収めた、プロの料理人なのだ。

そんな彼らが、致命的な調理ミスなど犯す訳が無い……アイリスディーナは一体何がそんなに不満なのか理解出来なかったのだが……。

「いや、そういう事じゃなくてさ……確かに料理自体は凄く美味しいよ。だけどあまりにも高級過ぎて、

なんか食べた気がしないっていうか……勿体無いっていうか……」

「……なん……だと……！？」

テオドールの言葉に、驚愕の表情を隠せないアイリスディーナ。

そう、確かに彼らが作った料理は、まさしくプロの手によって生み出された高級料理その物だ。

素材自体も一般市民には簡単に手が出せない高級品が使われているし、その素材の旨みもプロの手によって最大限に引き出されている。

だが彼らの高級料理を日常的に食べているアイリスディーナとは違い、テオドールが居候させて貰っているホーエンシュタイン家は、ごく普通の収入の一般的な中流家庭……悪い言い方をすれば「庶民」なのだ。

そんなホーエンシュタイン家で暮らしているテオドールが、突然こんな長ったらしい名前の高級料理を出されよう物なら、あまりに高級過ぎて逆に引いてしまうのも無理も無いという物だろう。

「テオドールお前、貧乏性にも程があるだろう！？」

「……ふふふ……ふふふふふ……あははははははははははははははは！！」

その様子を先程から米を炊きながらドヤ顔で見つめていたリイズが、戸惑いを隠せないアイリスディーナの姿を見て高笑いした。

「アイリス。アンタはやっぱりお兄ちゃんの事を何も理解していなかったみたいね。」

「な……何だと……！？」

「確かにこの人たちの実力は認めるわ。だけどどれだけ高級料理を出そうが、お兄ちゃんを満足させられなければ意味が無いの……高級料理という選択をした時点で、アンタの負けは最初から決まっていたのよ！！」

「……ば……馬鹿な……っ……！！」

驚愕の表情で崩れ落ちるアイリスディーナを、リイズは物凄い笑顔で見下していたのだった……。

3. アネットとファムの料理

「申し訳ありませんお嬢様！！私たちの力が足りなかったばかりに、お嬢様に恥をかかせてしまいました！！」

とても申し訳無さそうな表情で、アイリスディーナに頭を下げる料理人たち。

だがそんな3人をアイリスディーナは全く責める事無く、穏やかな表情で優しく包み込んだ。

「お前たちのせいではない。お前たちは本当に最高の料理を作ってくれた。」

「ですが……！！」

「リイズの言う通りだ。これはテオドールの好みを把握していなかった、私のメニューの選択ミスが招いた結果だ。」

「お……お嬢様……！！」

テオドールが残した長ったらしい名前の、訳の分からない高級肉料理を食べながら、無様に敗北したアイリスディーナはリイズたちの調理する光景を見つめていたのだが。

その光景を見ていたリイズが全身から漆黒のオーラを放ちながら、物凄い表情でアイリスディー

ナに突っかかってきたのだった。

「ちょっとアイリス！！それってお兄ちゃんとの間接キスなんじゃないの！？」

「何だリズ、鍋に火をかけたまま放置していてもいいのか？折角の料理が焦げてしまっても知らないぞ？」

「お生憎様！！お米を炊く時間ならちゃんと計算してます！！それよりも私を差し置いてお兄ちゃんと間接キスなんて許さないわよ！！」

「これは私の使用人たちが作った料理だ。だから私が処分するのは至極当然の事だ。」

「抜け駆けは許さないわよ！！私にも食べさせなさいよおっ！！」

「駄目だ絶対に渡さん！！」

アイリスディーナとリズがしょもない争いをしている最中、料理を完成させたアネットが颯爽とテオドールに料理を差し出してきた。

どうやらアネットの料理も、アイリスディーナと同様の肉料理のようなのだが・・・。

「さあテオドール、どうぞ召し上がれ。」

「・・・こ・・・これは・・・！！」

「私はアイリス先輩のようなミスはしないわ。やっぱり料理と言うのは単純明快じゃないとね。」

アネットが作った料理は、とても豪快かつシンプルな代物だった。

両側から鶏肉の大きな骨が豪快に突き刺さった巨大な肉の塊が、焼きたての鉄板の上でジュージューと派手な音を立てて、もう今にも肉汁が零れ落ちそうな勢いだ。

「・・・マ・・・マンガ肉・・・だと・・・！？」

驚愕の表情で、テオドールは目の前の肉の塊を見つめていたのだった。

「マンガ肉とは何だ！？テオドール！？」

「マンガ肉と言ったらマンガ肉だ！！それ以上でもそれ以下でも無いんだあっ！！」

聞いた事の無い名前の料理に戸惑いの表情を隠せないアイリスディーナを尻目に、テオドールは豪快にマンガ肉にかぶりついたのだった。

絶妙な焼き加減で焼かれた肉の塊から解き放たれた肉汁が、テオドールの口の中に一斉掃射されていく。

「ま、まさかマンガ肉の実物を、実際にお目にかかる日が来ようとは！！」

「この間、店長にも提案したんだよね。マンガ肉をメニューに入れられないかって。」

「うおおおおおおおおおおおお！！美味しい！！美味しいぞおおおおおおおおおっ！！」

「シンプル故に調理も楽だしコストも抑えられるから、低価格で出せるんじゃないかって店長に言ったら、これは面白い、上層部に伝えておくって褒められたのよ。」

「うおおおおおおおおおおおお！！」

素材もアイリスディーナの料理とは違い、その辺のスーパーで安売りされている代物だ。

だからこそテオドールも、変な遠慮をせずに豪快に食べられるのだろう。

とても美味しそうにマンガ肉にかぶりつくテオドールを見て、自分の料理をまともに食べて貰えなかったアイリスディーナは、とても悔しそうな表情を見せたのだった。

「リズ。アンタの言う通りだわ。テオドールの事をちゃんと理解している人こそが、この戦いの勝者となる・・・私はテオドールの性格なら下手に高級な食材を使った料理よりも、こういった手軽に食べられる料理を選んでくれると、最初から確信していたのよ。」

「.....」

「アンタには悪いけど、テオドールと明日デートするのはこの私よ。アンタが今から何を作ろうとしてるのは知らないけれど、見なさいよこのテオドールの満足そうな顔・・・」

「・・・ふふふ・・・」

「アンタの言葉をそっくりそのまま返してあげる。せいぜい無駄な足掻きをするがいいわ！！はーはーはーはははははは！！」

勝ち誇るアネットを尻目に、テオドールが豪快にマンガ肉を完食したのだが・・・その時だ。

「・・・た・・・炭水化物・・・」

「・・・え？」

突然テオドールが、とても苦しそうな表情を見せたのだった。

「炭水化物！！炭水化物が食いてえええええええええええええええええええええええ！！」

「ちょっとテオドール、いきなりどうしたのよ！？」

「炭水化物！！誰か炭水化物をおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

悶え苦しむテオドールに、訳が分からないといった表情のアネット。

あれだけテオドールに満足して貰えたのに、一体自分の料理の何がいけなかったのか・・・。

「・・・ふふふ・・・ふふふふふ・・・あははははははははははははははは！！」

「な・・・リズ！？」

だがその様子を見ていたリズが、初めからこうなる事が分かっていたと言わんばかりの勝ち誇った笑顔で、鍋の中に切り刻んだ野菜を入れながら、アネットに威風堂々と告げたのだった。

「・・・アネット。私は同じファミレスのキッチンで働く貴方なら、もう少し歯応えがあると思っていたんだけどね。なのに結局はその程度・・・貴方には失望させられたわ。」

「何ですって！？リズ・・・！！」

「貴方のマンガ肉は、栄養のバランスが全然整っていないのよ。」

「そんな馬鹿なはずがないわ！！ちゃんとこうして野菜だって添えて・・・！！」

「あれだけの肉の塊だもの。ちょっと野菜を添えただけじゃ、マンガ肉の強烈なインパクトを鎮められないわ。結局の所、所詮は脂肪とたんぱく質と鉄分の塊に過ぎない・・・これではお兄ちゃんが炭水化物を欲しがって当たり前よ。」

「・・・っ！？」

リズの言葉で、アネットは驚愕の表情でその場に崩れ落ちたのだった。

テオドールを満足させる・・・それだけに拘り過ぎて、アネットはそういった細かい所にまで気を回せなかったのだ。

「ば・・・馬鹿な・・・っ・・・！！」

「この時を待っていたわ。アネットちゃん。」

「な…ファミ先輩！？」
「さあテオドール君。どうぞ召し上がれ。」

とても勝ち誇った笑顔で、ファミは炭水化物不足で苦しむテオドールに料理を提供したのだった。
お椀の中に入っているのは、どうやら様々な肉と野菜を具材とした、透明な麺類のようなのだ
が…。

「こ、これは…！？」
「ブンボーフェよ。私の故郷のベトナムでの郷土料理なんだけど、お米で作った麺と言えれば分か
りやすいかしら？」
「米！？米！？炭水化物！？」
「そうよテオドール君が欲しがってる炭水化物よ。さあテオドール君、存分に味わって♪」
「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

喜びを顕わにするテオドールを見て、ファミは勝ち誇ったかのようなドヤ顔をアネットに見せたの
だった。

アネットが用意した食材を見た時点で、ファミはアネットが豪快な肉料理を出す事も、アネットの
料理を食べたテオドールが炭水化物を欲するであろう事までも確信していたのだ。

だからこそファミは、テオドールがアネットの料理を食べ終わるタイミングで米麺を出せるように、
わざと意図的に調理を遅らせていたのだ。

この料理対決は「テオドールを一番満足させた者」が優勝…それさえ満たせば過程などどうで
もいい。

そう…自分の料理でテオドールを一番満足させる為に、ファミはアネットを踏み台にしたのだ。
ファミの意図を察して悔しがるアネットだったが…テオドールが麺を口にした瞬間。

「…ぶううう(泣)！！」

突然テオドールが泣きそうな表情で、麺を盛大に吐いたのだった。
予想外の出来事に、ファミは戸惑いを隠せない。

「ちょ、テオドール君、一体どうしたの！？」
「ファミ先輩、アンタ、この麺の中に何を入れたんだよ！？」
「何って…もう、私の口から言わせる気…？」

顔を赤らめながら、ファミはとても恥ずかしそうに告げたのだった。

「…私の、愛e」
「うわああああああああ、うわああああああああああああああああああ(泣)！！」

泣きそうな表情で慌ててうがいをするテオドールを見て、戸惑いを隠せないファミ。

「テオドール君ったら酷いわ！！私が心を込めて作った料理なのに！！」
「いや心を込め過ぎて重過ぎるわ！！アンタこれ実際に食べてみろよ！！」
「食べてみろって…だってベトナム料理なら私の得意とする所…」

ファミがテオドールにまともに食べて貰えなかった麺を、怪訝そうに口にした瞬間。

「…ぶううううううううううううううううううううううううううううううう(泣)！！」

泣きそうな表情で、盛大に麺を吐いたのだった…。

4. カティアとキルケ、ベアトリクス of 料理

「ったく、どいつもこいつも情けねえ奴らなあ。テオドールの事を少しも満足させられてねえじゃねえかよ。」

先程から腹を空かせたままのテオドールの泣きそうな表情を見て、ヨアヒムは呆れた表情で溜め息をついたのだった。

試合開始から既に15分が経過したのだが、先攻したアイリスディーナ、アネット、ファムのいずれの料理もテオドールを満足させるには至っていない。

プロの料理人に作らせた高級料理を、勿体無いという理由で拒絶されたアイリスディーナ。
高たんぱく質、高脂質のマンガ肉を炭水化物不足で拒絶されたアネット。
名状しがたい何かを入れたせいで米麺を拒絶されたファム。

彼女たち3人が無様に敗北する姿を、先程からリズが物凄い笑顔で見下していたのだが。

「…次は私の番のようですね。」

そんな3人の姿を目の当たりにしてもなお、自信に満ち溢れた表情を崩さないカティアが、テオドールに料理を差し出してきた。

皿の上に綺麗に並べられたカティアの料理…それは…。

「アネットさんもファム先輩も、料理のインパクトに拘り過ぎなんですよ。やっぱり料理というのは質素で素朴な物が一番です。」

「…こ…これは…！？」

「スタッフド・ピーマンです。さあテオドールさん、どうぞ召し上がれ♪」

一般家庭でも普通に食されている、極々普通の家庭料理…ピーマンの肉詰めだった。

真っ二つに両断された鮮やかな緑色のピーマンに、丸め込まれた鶏の挽肉がしっかりと詰め込まれ、蒸し焼きにされた事で肉汁がピーマンの中から逃げずにしっかりと閉じこもっている。

タレも市販の物ではなく、ケチャップと醤油をベースにしたカティアの手作りの代物のようだ。さらに味のアクセントとして、ゴマ油とブラックペッパーも使われている。

まさしく完璧なピーマンの肉詰め…適度に焼かれた挽肉から漂う香りが、テオドールの食欲を刺激したのだが…。

「…た…食べられない…っ…！！」

「え！？」

目から涙を流しながら、テオドールはピーマンの肉詰めを一口も食べる事無く、ナイフとフォークをテーブルの上に置いたのだった。

その予想外の事態に、戸惑いを隠せないカティア。

「そんな、一体どうしてなんですか！？テオドールさん！？」

自分の調理にミスは無かったはず。自分でも自画自賛してしまう程の、テオドールへの愛情をたっぷりと込めた、最高のピーマンの肉詰めが出来たはずなのに。

「…ふふふ…ふふふふふ…あはははははははははははは！！」

「な…リーズさん！？」

だがその様子をフライパンでハンバーグを焼きながら物凄い笑顔で見つめていたリーズが、初めからこうなると分かっていたと言わんばかりに、誰もが予想もしなかったとんでもない理由を語ったのだった。

「残念だったわねカティアちゃん…お兄ちゃんはね、ピーマンが大の苦手なのよ！！」

「はああああああああああああああああああああああああ！！？」

あまりにしょーもない理由に、カティアは口をポカーンと開けて唾然としてしまう。

そして涙を流しながら、テオドールはピーマンの肉詰めを激しく拒絶したのだった…。

「この料理対決で勝負を決めるのは、お兄ちゃんを満足させる事…どれだけ最高のスタッフド・ピーマンを作ろうが、それでお兄ちゃんを満足させられなければ何の意味も無いわ。」

「くっ…！！」

「スタッフド・ピーマンというメニューを選択した時点で、既にカティアちゃんの敗北は決まっていたのよ！！あはははははははははははは！！」

物凄い笑顔で高笑いするリーズを見て、カティアはとても悔しそうな表情を見せる。

「テオドールさん、もう高校生にもなって何子供みたいな事言ってるんですか！？」

「嫌だああああああああ！！ピーマンだけは絶対に嫌だああああああああああ(泣)！！」

「好き嫌いは駄目ですよテオドールさん！！ほら口を開けて下さい！！」

そう言ってカティアはフォークをピーマンの肉詰めにぶっ刺し、無理矢理テオドールに食べさせようとする。

「はい、テオドールさん、あーん(激怒)！！」

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だああああああああああああああああ(泣)！！」

こんなはい、あーんは嫌だ…。

カティアの両手首を掴んで必死に抵抗するテオドールだったのだが、そこへキルケが自信に満ちた笑顔で、颯爽とテオドールの前に立ちはだかったのだった。

「全くカティアちゃんったら、テオドール君が嫌いな物を無理矢理食べさせようとするなんて、幾ら何でも酷過ぎるにも程があるわ。」

「な…キルケさん！？」

「さすがにこのメニューなら、食べられない人なんてそうそういないと私は思うのだけれど？」

キルケがテオドールに提供したのは…これまたカティアのピーマンの肉詰めと同様の、極々普通の家庭料理…オムライスだった。

焦げ目1つ無い完璧な焼き加減の、色鮮やかな黄金色のふわふわの玉子も見事だが、何よりも特徴的なのは一般的なチキンライスではなく、ドライカレーを使用しているという点だ。

ふわふわの玉子の甘みとドライカレーのピリ辛が、口の中で絶妙にマッチするのは間違いない。そのドライカレーから放たれる香ばしい香りが、今にも腹ペコで死にそうなテオドールの食欲を刺激する。

そしてオムライスにはケチャップで、可愛い猫のイラストが無駄に器用に描かれていたのだが。...

「さあテオドール君、どうぞ召し上が...」

「...た...食べられない...っ!!」

「...え!？」

涙を流しながらテオドールは、スプーンをテーブルの上に置いたのだった...

予想外の出来事に、キルケは戸惑いを隠せない。

「幾ら何でも酷過ぎるぞキルケ...!!これを食べるなんて残酷な事、俺に出来るわけねえじゃねえかよおおおおおおおおおおおおっ(泣)!!」

「残酷って、一体何を訳の分からない事を言ってるのよ!？」

テオドールの言っている事が全くもって理解出来ない。このオムライスを食べる事の一体どこに『残酷』な要素が含まれているというのか。

テオドールが嫌いなピーマンは全く使っていないし、全く調理ミスが無い完璧なオムライスを作ったはずだ。

だがその様子を皿にご飯を盛りつけながら見ていたリズが、まるで初めからこうなると分かっていたと言わんばかりに、物凄い笑顔でキルケに真相を語ったのだった...

「残念だったわねキルケ。お兄ちゃんね...大の猫好きなのよ!!」

「はあああああああああああああああああああああああ!？」

ケチャップでオムライスに無駄に器用に描かれていたのは、とても可愛い猫のイラストだ。

それ故に猫好きのテオドールには、どうしてもこれを食べる事に抵抗を感じてしまうという訳だ。

このオムライスにスプーンをぶっ刺すという事は、この可愛い猫のイラストをぐちゃぐちゃに崩してしまう事を意味するのだから。

「ちょ、猫好きって...えええええええええええええええええええええええ!？」

「確かに貴方のオムライスは見事な代物だったわ。だけどオムライスに猫のイラストを描いた時点で、既に貴方の敗北は決まっていたのよ!!あははははははははは!!」

「そんな馬鹿なあああああああああああああああああああああああ!!!」

その場に崩れ落ちるキルケを尻目に、今度はベアトリクスが威風堂々とテオドールの前に立ち上がったのだった。

だが何故かベアトリクスは、その手に何も料理を手にしていない。

とても妖艶な笑みを浮かべながら、今にも腹ペコで死にそうなテオドールを見つめている。

「全く、どいつもこいつも情けないにも程があるわね。料理という物の本質をまるで分かっていない連中ばかりで笑ってしまうわ。」

「ちょっとベアトリクス先輩、料理の本質って、先輩は何も作ってないじゃないですか!!」

そう・・・リズの言う通り、ベアトリクスは先程から全く料理を作っていないのだ。
ただ威風堂々とドヤ顔で、テオドールたちが騒ぐ光景を見つめていただけだ。
アイリスディーナのようにプロの料理人に作らせるという訳でもない。それ所か彼女のテーブルには食材自体が用意されていなかったのだ。
それなのに一体何をテオドールに提供しようというのか。

「貴方達は何も分かっていないみたいね。そもそも男の子が本当に喜ぶ物が一体何なのかを。何を提供すれば喜んで貰えるのかを。」

「何ですって・・・！？」

「うふふふふ・・・。」

だがベアトリクスがテオドールに『提供』しようとした物・・・それは誰もが予想もしなかったとんでもない代物だった・・・。

「・・・ねえ、テオドール・・・。」

「な・・・何すか？ベアトリクス先輩・・・。」

「・・・私を、食・べ・て♪」

突然ベアトリクスはエプロンを脱ぎ捨てて制服のボタンを外し、テオドールの右手を自らの豊満な胸に当てたのだった。

柔らかくて温かいベアトリクスの胸の感触が、ダイレクトにテオドールの右手に伝わってくる。

「あ、えあ、あ、おうお、あ、はいはいはいはいはいはいはいはいはい！！？」

いきなりの出来事にテオドールは頭の中が真っ白になり、興奮のあまり目をグルグルさせてしまったのだった。

「ちょっとベアトリクス先輩！！お兄ちゃんに何やってるんですかああああああああああ！！？」

「この間買った少女漫画に載っていたのよ。こうすれば男の子は最高に喜んで貰えるってね。」

「はああああああああああああああああああああああああ！！？」

「貴方も言っていたように、この料理対決の本質はテオドールをどれだけ満足させられるかが鍵になるわ。これで満足しない男の子なんて、アスクマンのような余程の変態でも無い限り、そうそういないと思うのだけれど？」

「いや満足も何も、最早料理対決ですら無いわあああああああああああああああつ！！」

鍋の中身を味見しながら文句を言うリズを完全に無視し、テオドールの右手をしっかりと掴んで自らの豊満な胸から決して逃がさないベアトリクスだったのだが。

何故なのだろう。こうしてテオドールに胸を触られると、何だかとても胸が高まってくる。とても愛おしい気持ちになってくる。

今までシュター部の男性部員たちに面白半分で胸を触らせて、からかってみた事があったのだが、それでもこんな気持ちになった事は今まで一度も無かったというのに。

（・・・そ、そんな、駄目よ、私にはユルゲンという心に決めた人が・・・そ、それなのに・・・っ！！）

「ベアトリクス先輩、もう勘弁して下さいよおおおおおおお（泣）！！」

（な、何なのよこれ・・・！？何だか彼の事がとても愛おしく思えてくる・・・！！こんな・・・こんなのって・・・！！）

先程までテオドールを見下した態度を取っていたベアトリクスだったのだが、いつの間にか完全にテオドールに対して慈愛の表情を見せるようになってしまっていた。

うるうるした瞳で右手を離してくれと懇願するテオドールの表情、そして自分の胸を触るテオドールの右手の感触が、どんどん愛おしく感じられてしまう。

もっと私に触れて欲しい、もっと私を感じて欲しい、もっと、もっと、もっと…もっと！！

(し、信じられない…これが…これが恋愛原子核の力だというの！？)

「…おい、ベアトリクス。ちょっといいか？」

だがそこへ物凄い表情のアイリスディーナがベアトリクスの右手を掴み、そのままズルズルとベアトリクスを教室の外へと連行してしまったのだった。

「ちょっとアイリス、何するのよおっ！？」

「いや、今後の事について、ちょっとお前と話し合う必要が出たと思ってな。」

「ああん、そんな、ちょっと待って、テオドールうううううううう！！」

「…この浮気者が。」

「嫌ああああああああああああああああああ！！」

アイリスディーナに無様に引きずられながら、必死にテオドールに手を伸ばす情けないベアトリクスの醜態を、リズたちが唾然とした表情で見つめていたのだった…。

5. リズとアスクマンの料理

「…ま、まあ、羨まし…あ、いや、とんでもない出来事があった訳だが…これでまだテオドールに料理を出してないのはリズとアスクマンだけだな。制限時間は残り10分を切った訳だが…。」

馬鹿が…！！無様に敗北したアイリスディーナたちを嘲笑うかのような物凄い笑顔で、ヨアヒムの言葉と同時にリズが颯爽とテオドールの前に立ち上がったのだった。

未だベアトリクスの胸の感触の余韻に浸ってしまっているテオドールだったのだが…リズが提供した料理の香りを嗅いだ瞬間、その余韻が一気に吹き飛ばされてしまう。

「やれやれ、お兄ちゃんを満足させられるのは、やっぱりこの私しかいないみたいね。」

「こ…これは…この料理は！！」

「さあお兄ちゃん、どうぞ召し上がれ♪」

リズがテオドールに提供したのは…何の変哲も無い、ただのハンバーグカレーだった。

米も、ルーも、野菜も、ハンバーグに使われている牛の挽肉も、その全てがその辺のスーパーで安売りされている、極々普通の素材ばかりだ。

アイリスディーナが作らせた高級肉料理や、カティアやキルケの料理のように、調理方法に工夫を凝らしてる訳でもない。かと言ってアネットやファムの料理のように奇抜な料理という訳でもない…本当に極々普通のハンバーグカレーだ。

「何よこれ、ただのハンバーグカレーじゃない。私のオムライスでさえもテオドール君を満足させられなかったのに…。」

そうこうしてる間にテオドールは、あっという間にハンバーグカレーを完食してしまった。
アイリスディーナたちの時とは違い、テオドールはとても満ち足りた表情をしている。
それは今回の料理対決で、リズが圧倒的に優位に立った証だ。

「・・・お兄ちゃんの大嫌いなピーマンもハンバーグの中にこっそり入れたんだけど、全然気付かなかったでしょ？」

「え！？マジかよ！？」

とても自信満々な笑顔でそう告げるリズに、テオドールは驚きを隠せずにいた。
自分が食べたハンバーグからは、ピーマンの独特の苦味など全く感じなかったからだ。
リズに真相を明かされても尚、テオドールは信じられないといった表情をしている。

「カティアちゃんったらお兄ちゃんが食べられないって言ってるのに、無理矢理ピーマンを食べさせようとするんだもの。全く何考えてるんだか。」

「ぐぬぬぬぬ・・・！！」

「これで今回の料理対決の勝者は私に決まったも同然よね。ほら見なさいよ、私のカレーを食べたお兄ちゃんの、この満足そうな笑顔・・・アンタたちには悪いけど、明日お兄ちゃんとデートするのはこの私よ。」

明日のデートの光景を頭の中で想像し、気持ちを高ぶらせていくリズ。

明日は2人で一緒に映画を観て、洒落たカフェで昼食を食べて、その後遊園地にでも遊びに行き、観覧車の中で2人きりになって・・・そして・・・

『・・・リズ・・・俺はお前の事が好きだ・・・ずっと前からお前の事が好きだったんだ。』

『お兄ちゃん・・・嬉しい・・・！！』

『俺は今からテオドール・ホーエンシュタインに改名する！！だから俺と結婚してくれ！！』

『お兄ちゃんああああああああん！！』

『うおおおおおおおおおお！！』

テオドールに押し倒されたリズは、そのままテオドールと唇を重ね・・・そして・・・

「・・・ぐへ、ぐへへ・・・ぐへへへへへ・・・。」

口からヨダレを垂らしながら、物凄い表情で興奮するリズを見て、とても悔しそうな表情を見せるアイリスディーナたち負け犬共だったのだが。

突如部屋中を満たした香ばしい香りが、一瞬でリズを現実世界へと引き戻したのだった。

「勝ち誇るのは、テオドール君が私の料理を食べてからにしたらどうかね？リズ君。」

「・・・な・・・！？アスクマン、アンター一体何考えてるのよ！？」

アスクマンがテオドールに提供した料理・・・それを見たリズは戸惑いの表情を隠せなかった。

「青椒肉絲(チンジャオ・ロースー)だ。さあテオドール君、遠慮せずに食べたまえ。」

ピーマンがふんだんに詰め込まれた、中国発祥の豚肉料理・・・それをアスクマンは自信に満ち溢れた笑顔でテオドールに提供したのだ。

先程のカティアの件で、テオドールがピーマンを食べられないのは実証済みのはず・・・にも関わ

らずピーマンが大量に使われた青椒肉絲を提供するとは、一体どういうつもりなのか。

この青椒肉絲がどれだけ美味な代物であろうとも、それでテオドールを満足させられなければ何の意味も無いというのに。

だがリズの予想に反して、テオドールは目の前の青椒肉絲から放たれる芳醇な香りに引き寄せられ・・・震えた手でピーマンを箸で掴み取ったのだった。

「ちょ、ちょっとお兄ちゃん!？」

「・・・お、おかしいよな・・・俺、ピーマンは食べられないはずなのに・・・それなのに、こんな・・・」

先程リズのハンバーグカレーを完食したばかりのはずなのに、青椒肉絲から放たれる芳醇な香りが、再びテオドールの食欲を目覚めさせたのだった。

そしてテオドールが恐る恐るピーマンを口の中に放り込んだ・・・次の瞬間。

「……………!!!!!!????????」

ビクンビクンビクン。

全身を凄まじい勢いで電撃が駆け巡り・・・そしてテオドールはいつの間にか無我夢中で、青椒肉絲を口の中に流し込んでいたのだった。

予想外の出来事に、リズたちは驚きを隠せない。

テオドールはピーマンが大の苦手のはずだ。それなのにこれは一体どういう事なのか。

「う、美味い!! 何て美味さなんだ!! これが、このピーマンの苦さが、何故か俺の心を限りなく満たしていく!!」

「そんな馬鹿な! ? お兄ちゃん正気に戻ってよ!! ねえ一体どうしたっていうの! ?」

「俺にもよく分からねえよ!! だけど美味いんだ!! 美味いんだよこのピーマンが!!」

テオドール自身も戸惑いを隠せないようで、嫌いなはずのピーマンが大量に詰め込まれた青椒肉絲を、涙目になりながらもあっという間に平らげてしまったのだった。

「一体何がどうなってるのよ! ? この青椒肉絲に一体何があるっていうの! ?」

「そう言うだろうと思い、君の分も作っておいた。さあ食べてみたまえ。」

アスクマンが差し出した皿を渋々受け取ったリズが、箸でピーマンを口にした次の瞬間。

「・・・くっ・・・んんんんんんっ・・・!!」

ビクンビクンビクン。

リズの全身を凄まじい勢いで電撃が駆け巡り・・・涙目になりながらリズは悔しそうにその場に崩れ落ちたのだった。

「どうして・・・! ? 一体何をどうしたら、こんな・・・!!」

「それはこの青椒肉絲のタレに、隠し味として〇〇〇を仕込んだからなのだよ。」

「な・・・〇〇〇! ? たったそれだけでここまで劇的な風味が生まれる物なの! ?」

悲しい事に作者に料理の知識が全然無いもんだから、隠し味が伏字になってしまっていた・・・。

驚愕の表情で崩れ落ちるリズを、ドヤ顔で見下すアスクマン。

その様子をアイリスディーナたちも、戸惑いの表情で見つめている。

「リズ君。君のハンバーグカレーはピーマンの風味を殺した、所詮はまやかしの料理に過ぎん…素材を活かすというのは、こういう事だ。」

「貴様あっ！！」

「全くどいつもこいつも、料理という物の本質を全く理解していない連中ばかりで呆れてしまうよ。は————っはっはっはっは！！」

自分の勝利を信じて疑わないと言わんばかりに、アスクマンは崩れ落ちるリズを見下しながら高笑いしたのだった…。

6. 決着

「さて、これでテオドールは全員の料理を食べたようだな。それじゃあ早速だが明日リズとアスクマンのどちらとデートするのか、テオドール自身に決めて貰おうじゃないか。」

仕方が無いとはいえ、最早完全にリズとアスクマンとの二者択一になってしまっていた…。
ヨアヒムに促されてテオドールは起立し、リズたちの前に歩み寄る。

「果たしてテオドールはどちらの料理が満足したのか…満足した料理を作った奴の右手を取れ。テオドールに右手を握られた奴が、明日テオドールとデートする事になる。分かったな？」

「お兄ちゃん、私のハンバーグカレーが一番美味しかったよね！？」

「まさに失笑する他無し…私の青椒肉絲を食べたテオドール君がどれだけ満足したのか、結果は誰が見ても明らかじゃあないか。はははははははは！！」

とても不安そうな表情を見せるリズ。

自分の勝利を確信したと言わんばかりのアスクマン。

完全に蚊帳の外に置かれてしまったアイリスディーナたち。

そんな彼女たちの光景を、ヨアヒムはニヤニヤしながら見つめていたのだが。

「幾らお兄ちゃんでも、こんな変態野郎とデートしようなんて到底思わないよね！？だから絶対私を選んでくれるよね！？」

「ふん、性別などという下らないしがらみ如きで、私とテオドール君の愛を阻む事など出来る物か！！」

「お兄ちゃん！！」

「テオドール君！！」

2人に迫られ、戸惑いの表情を隠せないテオドールだったのだが。

それでもテオドールは、決断しなければならない。

決断しなければテオドールには、1週間ものトイレ掃除という過酷な罰則が待っているのだ。

リズのハンバーグカレーも、アスクマンの青椒肉絲も、互いの持ち味を存分に引き出した最高の料理だった。

その中で、どちらの料理が満足出来たかを選ぶとなると…。

「…ア…アスクマン先輩…っ…(泣)！！」

断腸の想いで、テオドールはアスクマンの右手を取ったのだった…。

